

昭和三年二月十六日第三種郵便物認可(毎月)一回一日發行

# 聖書之真理

第十四號

五月號

主筆 江原萬里

十字架に對する二種の見解

主筆

教會以外に救なし

藤本武平二

ロマ書の釋述

江原萬里

神の義なくば救なし

クロムウエル傳

江原萬里

序論 チャールズ一世

イスラエルの民とその神

江原萬里

歴史の特異

柏木通信

齋藤宗次郎

コロンブス 編輯餘録

昭和六年五月一日發行

## コロムブス

我等は人類の社會的生活に於ける此の眞の自由獲得のために一生を献げるのに價する。それは胃袋の欲望満足のために働かないで、靈魂の欲求を満すために生業に従事することである。それ故多くの人々が『必然』と見る大自然と戦つて之を征服しやうとする。又最近の社會科學の一派が主張する『社會的必然』と戦つて之に打ち克たうとする。或は深山幽谷と戦ひ、大砂漠と戦ひ、海洋と戦つて之が主人となり、不治の病と戦つて之に勝ち、又懶惰、享樂、嫉妬、無情、憎惡、鬭争と戦つて、勤勉にして質實、獨立にして一致、競争にして且つ協調、公義にして且つ憐憫ある社會となさうとするのである。之がために現代は新に靈界の眞理發見者ルーテルを要すると同時に物界の新大陸發見者コロムブスを要する。

底ひも知らぬ大海原、嘗て何人も航海したここのない四顧水又水の大洋の彼方に、彼は新大陸を發見しやうとして乗り出したのである。西南から吹き來る逆風に波は逆巻き、船は木の葉のやうに飄弄されて往く路を遮ぎられ、洋上に漂ふこゝ既に數十日、船員は極度の困憊と、どこまで往つても大陸を發見し得ない失望と、更らに航海を續けるならば、海洋の彼方に大瀑布があつて船諸共それに吸込まれるであらうこの恐怖さに驅られて、彼等はず中途中途から歸航を迫り、徒黨を組んで彼に反抗した。コロムブス自身も亦日夜焦慮のため疲労と疑惑に襲はれ、只一人苦杯を飲んだ。彼の前途は混沌であつて、自然も人も彼に敵し、彼の目的は不可能のやうに見えた。

然かも彼は毅然として確信の上に立ち、自己と自己の周圍の人々に打ち克つたのである。やがて不可抗と見えた自然も亦彼に服し、西南からの逆風はやみ、東風はそよそよ吹き來り、彼は此の順風に力を得て混沌たる暗黒の大洋を乗り切り、遂に彼方に新大陸を發見したのであつた。こゝに近代史は始まつたのである。

不可能か、然りそれは不可能であつた。然かも彼は之と戦つて之に勝ち、新時代を創めたのである。あゝ人類よ、汝の新時代が来る前に此の不可能が横はる。若し之を避けるならば汝は沈滞して滅びるであらう。若し勇敢に之と戦はば、不可抗とせられ、汝の敵と見えた自然も社會的の諸力も皆汝に味方して汝を援け、遂に汝の新らしきアメリカを發見するであらう。そこに社會の眞の自由がある。

されば此の自然と社會との不可抗と戦つて之に勝ち得させる力は何處から來るか。それは自然以上、人間以上の實在者から來る。彼を信じて此の力が與へられるのである。そして遂に自由なる社會を建設し得るのである。此の自由の存するところに人類の向上進歩がある。富は之に従つて増進する。(聖書的現代經濟觀、富の増進の結語)

# 聖書之眞理

## 第四十三號

昭和六年五月一日發行

### 十字架に關する二種の見解

主 筆

基督教は十字架教なりとする者は多數である。

夫れは正しい。然し乍ら一體全體十字架とは何を意味するか。之に關して二種の見解がある。

其の第一は我國の基督教者の大多數が有つ見解であつて、十字架とは自分が十字架を負ふてキリストに従ふこととする。如何なる苦難、迫害、困窮、死をも厭はぬこと、神の御意こころと信せば如何なる結果が生じやうと顧念せず之を斷行すること、正義なりと信じたることを貫徹し、他人より受ける苦痛を忍び、人を愛すること、即ち、キリストの歩

み給ひし道を歩むこと、之れが基督教の中心たる十字架の意義なりとするのである。

實に主は其の弟子に告げ給ふた。『人もし我に従ひ來らんと思はゞ、己をすて、己が十字架を負ひて我に従へ』(マルコ傳八章三四)と。一身の安樂を求め、義を見て行ふの勇なき者が眞の基督教者のうちに在りとは思はれない。基督教者は實に己が十字架を負ふてキリストに従ふ者である。

然し乍ら之を以て十字架教と稱せられる基督教の本質であると思ふ者あらば、それは大なる誤解である。そして我國大多數の基督教者は此の誤解をなして居る。若し己が十字架を負ふてキリストに従ふことが基督教であるにせば、基督教の本質は自力によつて己が救を成就することであつて、基督教の説く神の愛、キリストの恩恵は何處にも見ることが得ない。

十字架に關する第二の見解、實に聖書の示すと

この見解は、十字架は我らの負ふ十字架でなく、主イエス・キリストの負ひ給ふた十字架を意味する。我ら各自が負ふべき十字架を、キリスト御自身我らに代つて之を負ひ給ふた十字架である。彼の苦難の死がそれである。我らは十字架上の彼を仰ぎ見て神に義とせられた事を確信するのである。『地の極なる諸々の人よ、なんぢら我を仰ぎのぞめ、然らば救はれん』(イザヤ書四十五章二二)である。

我等は十字架上のキリストを仰ぎ見て、人間の罪の如何に大なるかを悟る。神の之に對する正義の如何に嚴肅にして、之に罰するに己が獨子をも惜しみ給はざる程なるを知る。然かも此の罰を直接我らに負はしめず、御子をして之に代らしめ給ひ、之に由り彼を仰ぎ見、彼に信賴する者の罪を赦し給ふた事を知つて、神よりの和睦を疑はず安心して神と交はり得る。我らは又キリストの十字架を仰見て、神の御意に絶對に服ひ我らに代つて

此の苦難を受け給ふた彼の我らに對する深甚の愛に感謝し、今活きて我らを愛し給ふ榮光の主に我らの新生命の源を發見する。之れ聖書の示す十字架教であつて、そこに眞に救の希望、平安歡喜を見出したる者の見解である。かゝる者は此の愛のうち生きて現在の不幸苦難を物としない。樂しき時も憂ひの時も常にキリストに従ひ、其の慰を受け、十字架を負はされ乍ら之を輕ろしとする。

自分の荷ふ十字架がある。自分で荷はれる十字架がある。基督教は後者である。前者には常に苦痛が伴ひ、後者には常に歡喜平安感謝がある。

ベルは伏しネボ(共に偶像)は屈む。なんぢらの擡げあるきし物は重荷となりぬ。イスラエルの家の遺れる者よ、我に擡げられし者よ、我なんぢを負はん。我つくりたれば擡ぐべし。我また負ひ且つ救はん(イザヤ書四

六章)。  
である。

## 教會以外に救なし

藤本武平二

教會の人はいふ、人は教會に屬せざれば救はれない。誠にその通りである。吾等無教會の者もいふ、眞の教會以外に救なし。

キリストは仰せられた、『我は葡萄の樹、なんぢらは枝なり……人もし我に居らずば、枝のごとく外に棄てられて枯る、人々これを集め火に投入れて焼くなり』と(約翰傳十五章)。パウロは『體からだは一つにして肢あたまは多し、體の肢は多くとも一つの體なるが如く、キリストも亦然り云々』と(コリント前書十二章十二節)。贖はれし者のキリストに連なりて一つ體からだとなりしものはそれが眞の教會である。故に『人は教會に屬しなければ絶対に救はれない』この教會者の言は眞である。

吾々の良くいふ『エクレシア』とは昔希臘で立法

其他の目的に召集された市民會につけた名であつたのを聖書記者がキリストを主と仰ぐ人達の禮拜のために集まる團體に付けたのである、決して集會する建築物を呼んだのではない。英語の『チャーチ』獨語の『キルヘ』共に『教會』と譯す)は希語のクリヤコン『主の家』から來たものであらうこのことである。

無教會者の或るものはいふ『教會といひ、エクレシアといひ、主の家といひ、神の殿といふも、これは決して信者の團體を指すのではなく、聖靈を宿せる信者個々を指すのである』と。而して一人一黨主義とか唱へ『一人々々で直接キリストに連れば可なり、二人三人相寄るの必要更になし、自由と獨立とは眞理を學ぶ者の生命なれば聖徒の愛の集ひと稱して「教會化」すべからず』と。

これ非常な誤謬であつて、パウロが『書を、コリントに在る神の教會即ちいづれの處にありても、

我らの主、たゞに我等のみならず彼らの主なるイエス・キリストの名を呼求むる者ごごもに聖徒ごなるべき召を蒙り、キリスト・イエスに在りて潔められたる汝らに贈る』(コリント前書一章二節)と書いたのを見ても教會は單數で一つの教會即ちコリント教會を指示し、且つこの神の教會ごは汝ら(復數)の集まつて造つた團體であることを明らかに示して居る。

又パウロは『汝等は神の殿にして神の靈なんちらの中に在すことを知らざるか……』といつてゐる(コリント前書三章十六、十七節)。これも神の殿は單數でなんぢらは復數である、一人々々が各各一の殿であるご云ふのではなく、皆んなで一の殿を形造つてゐると云ふ意味である(内村先生著羅馬書の研究第二十二講)。

利己的な人間は考へる、萬有悉く是れ己が爲めに造られたり、キリストの血はたゞ己が罪を清む

れば足る、他人の罪などは清むるも可清めざるも可なりご。然し神の天地を創造し給ひし大經綸は決して人間個人々々の救濟を以て終るものではなく、宇宙を一大有機體として完成するに在る。神は人類全體の一團としての救濟、超個人的救濟、愛を以て結ばれたる神の殿として完成を目標としてその創造の大御業を今も尙ほ續け給ひつゝある。故に神は聖靈を團體の上に降し給ふ。従つて聖靈を受くるためには吾々は此の神の殿の一部となる必要がある。彼のペンテコステの日に聖靈が降つた時の如き、弟子たちが皆心を合せて一處に在つた時であつたのである。一の焰の如きもの現はれ岐れて彼等各人の上に止まり、彼等みな聖靈に満たされたご録してある。

汝等のうち二人三人我が名のために相集まる處には我も亦その中に在るなりご語り給ひしキリストは信者の相集まれる處に在まし給うて聖靈を降

し給ふのである。故に信者は能ふ限り集うて祈りを共にし聖靈の降臨を待望すべきである。聖靈を満たしめ給ひし時初めて吾等眞の兄弟たり、愛せざらんと欲するも愛せざるを得ざるに至り、聖書は何の註解書なくして然り々々アーメンを以て生ける生命の言葉として容易に受け容れることができるやうになるのである。

故に我々無教會者も教會者と共に叫ばざるを得ない、『教會以外に救なし』と。

然るに何の故ぞ、教會内に『教會外に救なし』と呼ばはる聲を聞かない。若し教會にして眞に聖靈の火に燃ゆるならば、人々をして悉く教會に屬せしめざれば止まないとの氣勢を示すべきではないか。教會者よ汝は無教會の叫びにおびえて其聲を潜めたるか、教會者よ大膽に立ちて呼ばはれ、獅子吼せよ、『人は教會に屬せざれば救はれない』と。無教會を稱ふる者すら眞の教會に入るの必要

を絶叫しつゝあるに非ずや。

然し教會者よ、『教會』とは建築物の謂ひではない、キリストを主と仰ぐ者の集團をいふのである。監督や法王を必要とする集團ではない、宏莊なる建築物を必要としない、洗禮も聖餐式も眞のキリストの教會であるか否かを分つ標準にはならない。組織とか信仰個條とかは眞の教會であるか否かに關係を持つものではない。斯く云ひて法王の下にあるからとて凡べての天主教徒が眞の教會に屬しないといふのではない、洗禮を受けたからとて眞の教會に屬しないといふのでも勿論ない。問題はキリストの十字架の下に罪を悔ひ御恵の故に罪を許されて聖徒の群に加へられたか否かにある、何の功績にもよらず、たゞ十字架上に流し給ひしキリスト・イエスの血により恩恵的に贖はれし者の二人三人又はそれ以上の集ひしものであるか否かに在る。かゝる見えざる教會に列なることは聖靈

を受くるため、最も緊要な事である、聖典も組織も第二義第三義的のものであつて、眞の福音ありや否やが第一義的のものであるといふのである。

故に、教會者よ、教派の如何は問題でない、先づ各自の教會をして眞の教會たらしめよ、眞の神の殿・主の家たらしめよ、而して大いに絶叫せよ、『教會外に救なし』と。

無教會者よ、汝も又叫べ『教會外に救なし』と。

内村先生の稱道された無教會主義とは、決して眞の教會を否定されたのではない、否な眞の教會を建てんがために偽りの教會を否定されたのである。目に見ゆる教會を建てんがためではなくして、見えざる眞の教會を建てんがためであつた。主の再臨し給ふ日に成立すべき見ゆる眞の教會は今日望む事はできない、故に今は『靈一つ、主一つ、信仰一つ、バプテスマ一つ』である全世界にたゞ一つの神のエクレシアに屬して、茲で聖靈の賜物を頂

かなければならない。

教會恐怖病に襲はれた所謂『無教會主義者』よ、『教會』とし云へば身の毛の慄つを覺ゆるは何の態ぞ。基督教は歡喜と希望を來らせし福音ならずや、不安と恐怖を除き平安を來らせし喜びの音づれならずや。『眞の教會化』は神が内村先生に畢生の事業として授け給ひし大任ではなかつたか。宇宙の完成は眞の教會化によつてのみ成就するのではないか。

眞の神の教會！眞のエクレシア！神の殿！主の家！教會者又無教會者といふ勿れ、夫れ々々々結びて一の神の殿となり、大なる神の教會の枝となつて『首に注がれたる貴きあぶら鬚に流れ、アロンの鬚に流れ、その衣の裾にまで流れ滴るが如く、又ヘルモンの露くだりてシオンの山に流るゝが如く』聖靈を受けようではないか、かくてこそ我等は眞にイエスを主と稱びまつる事ができるやうになるのではないか。

# ロマ書の釋述

江 原 萬 里

## 神の義なくば救なし

私は福音即ち凡て主イエス・キリストを信する者は何人も救を得ることを宣傳へる使徒である。

此の眞理は神の力である。何となれば神の義がこの福音のうちに顯はれ、何人とも主イエス・キリストを信する時明白に之を認め且つ獲得し、以て人間生活の至上の目的、最高の原理を把握し得るからである。今まで此の事を述べ來つた。

然らば此の福音を拒み、主イエス・キリストを信じない者はどうなるか。彼等は神の義を認めることが出来ない。それを己が者として神の前に義人とせられる事が出来ない。而して彼等此の神の義なくして自ら義人たる者は一人もない。彼等は

皆神に對する罪人である。それ故其の靈魂の將來は只滅亡あるのみである。彼等に對して最後の大審判の臨むことは必定である。されば救は唯主イエス・キリストを信じ、福音のうちに在る神の義を獲得すること以外にない。

## 一 異邦人の罪と其の罰

其の罪

眞の神を信じない此の世の人（異邦人）を視よ。18 それ神の怒は不義をもつて眞理を阻む人の、もろもろの不虔と不義とに對ひて天より顯はる。如何に彼等が不義を以て眞理を阻んで居るかを。爰に眞理と云ふのは哲學者が思索に由つて到達した人と世界と神とに關する哲理を云ふのではない。又科學者が自然と社會とを仔細に觀察して歸納した科學上の法則を云ふでもない。眞理とは眞の神を示すものである。此の眞理は我等之を信じ且つ實行して始めて其の眞理なる事を悟るのである。

主は言ひ給ふた。『わが教はわが教にあらず、我を遣し給ひし者の教なり。人若し御意を行はんと欲せば、此の教の神よりか、我が己より語るかを知らん』(ヨハネ七章一六)と。聖書の眞理はかゝる眞理である。諸君若し天地に正義なる神が活きて働き給ひつゝある事を疑ふか。自ら斷乎として正義と信するところの事を實行して見給へ、又諸君にして愛が最後の勝利者である事を疑はざ、自ら己が生命を與ふる程に己を憎む者を愛して見給へ、さらばそれが眞理である事を確信するに至るであらう。宗教上の眞理は只實行によつてのみ其の眞理なることが知られるのである。

然るに世の人は此の事を知りつゝ、然かも之を實行しない。彼等は皆不義をもて眞理を阻むて居るのである。そして『なんぢ心を盡くし、精神を盡し、思を盡し、力を盡して、主なる汝の神を愛すべし』(この敬虔と『おのれの如く汝の隣を愛すべし』

(マルコ傳二章二九以下)この道義に反し、不義をもて之を抑壓否定する。この不虔(無宗教)と不義(不道徳)とに對ひて神の御怒は天より顯るのである。神の怒とはやがて來るべき最後の大審判を云ふのである。バプテスマのヨハネは警告して云つた。

『蝮の裔よ、誰が汝らに、來らんとする御怒を避くべきことを示したるぞ……斧ははや樹の根に置かる』(マタイ傳三章)と。其の日來らば『地の王たち、大臣・將校・富める者・強き者・奴隸・自主の人みな洞と山と巖間に匿れ、山と巖間に對ひて言ふ』『請ふ、我らの上に墜ちて御座に坐し給ふ者の御顔より、羔羊の怒より、我らを隠せ、そは御怒の大なる日既に來ればなり、誰か立つことを得ん』(黙示録六章末節)と。神の御怒顯はれなば其の時は人々の戦慄恐怖の極に達するであらう。

彼等の上に此の最後の大審判の顯はれ來るべきは當然である。それは人々の不虔不義の責任の歸

するところであつて、之に對して何等辯解抗訴の餘地は存しない。19その故は神につきて知り得べきことは彼らに顯著なればなり。若し彼ら全く神を知る能力を有せず、神之を與へ給はず、神彼等に神につき知り得べき事を顯はし給はねば、彼等の不虔不義を罰し其の靈魂を滅亡に委ね給ふ神は或は不當であるかも知れない。然るに神これを顯し給へりである。彼等には良心がある、又理性がある、彼等は之によつて神を知り得べくある。彼等は各々神から人格を與へられて居る、之によつて彼等は神は己が人格以上の實在者であり給ふ事を悟り得る。神は之を通じて顯し給ふた。

勿論人は底ひも知らず、涯しもなく大宇宙全體を、朝に生れ夕に死する蜉蝣の如き身を以て測り知る事は出来ない。まして此の大宇宙の外に在し、之を創造し制御し給ふ神の永遠の御姿を仰ぎ見奉ることは絶對に不可能である。人は只『何者のお

はしますかは知らねども、忝じけなきに涙こぼるる』と歌ひし者のやうに、其の聖前に己を小さし、畏れ虔しむのが當然である。『空に輝く幾千萬の星と我がうちに存する道義の心』とを眺めて益々敬虔の念に満つべきである。然るに人は己が不義をもて殊更に此の眞理を抑制し、故意に不虔不義を行ふのである。

20それ神の見るべからざる永遠の能力と神性と  
は造られたる物によりて世の創より悟りえて明  
に見るべければ、彼等言ひ遁る術なし。

開闢以來自然のうちに存する嚴然たる秩序、日月の運行は時を違へず、四季各々序あり、而して春は百花妍を競ひ、秋は萬山錦を飾り、朝敦に輝く櫻花、夕陽に映ゆる沖つ白波の美觀、此の大自然（造られたる物）のうちに其の第一原因たる見るべからざる神の永遠の能力と萬物各々大なる目的に向つて進化しつゝあることよりして推知し得

る神の御性質の全體、即ちその神性とは、人の心のうちに之を感受し得る性能があつて、之に由り、人は之を悟り、神を知り得るのである。そして一度眞の神を知り得ば人は神に對して服従奉仕する義務が生ずる。されば彼等は無知なる故を以てその不虔不義の遁辭となすことは出来ない。彼等は神を知らされ、神に服従の義務を感じつゝ、故意に神に背いたのである。

邪道墮落の經路

かく大自然は神の偉大を示しその恩恵の豊かなることを語る。然るに彼等は<sup>21</sup>神を知りつつも尙神として崇めず、感謝せず、自然を通じて感じ得る神の永遠の能力と神性との知識を堅く把持しやうと思はず、無益の思索に耽けり、自分勝手な議論をなし、その念は空しく、神に關する眞實の知識は空虚の如く感せられ、あやふやとなり、之を確實なる基礎に置かしのめる道義の念を喪失して之

が主座を占むべき彼等の心は暗愚となつた。その愚なる心は暗くなれり、そして『愚なる者は心に神なしと云へり』詩篇一四章二である。

之がため彼等の生活は統一を缺ぎ、矛盾だらけとなり、生活の最高目的は目前の手段と混同され何れが主何れが従たるかが判然しなくなつた。然かも彼等は之を悟らない。<sup>22</sup>自ら智しと稱へて愚となり、全宇宙を統一支配し給ふ神から離れて自己中心となる時、その靈性の向上發達は止み、愚となり、墮落は始まる。

之を明かに表現するものが偶像崇拜である。彼等は大自然に神の永遠の能力と神性とを認めず、其の偉大に打たれず、其の恩恵に感謝せずば、遂に自己本來の姿を之に反映せしめ、之を神として拜するやうになる。それが偶像崇拜の經路である。神に由つて高められない自己本來の心は禽獸と大差はない。食慾性慾が其の主座を占め、本能が其

の指導者である。されば此の獸慾を満してくれる者を想像し、それを神とし、且つ永遠に<sup>23</sup>朽つることなき神の榮光、其の全知全能を之に附着せしめ、眞の神に易へて朽つべき人および鳥獸・匍ふ物に以たる像となすのである。

こゝに個人的又社會的道德の腐敗墮落の根源がある。全知全能全在の眞の神を狐や鳥や蛇とし、高々英雄とし、又知識ある者は之を物的なる社會的生産力とし、又自然的盲目的なる生命とし、凡て自己又は自己以下の者に引下げる時、何處に嚴肅なる正義があろう。己を十字架に釘ける者のために己が生命を與へる程なる深甚の愛があろう。眞に義しく且つ愛に在し、人間最高の道德的理想完成者たる眞の神を拜せずして何處に靈性の向上があるか。神を低く考へれば考へるだけ、かゝる偶像を拜すれば拜する程人間の墮落は大なるのである。彼等は故意に神に背いて偶像崇拜に墮落したの

である。彼等の墮落は彼等の自由意志に由つたのである。然し乍ら神は只彼等の爲すが儘に傍觀し之に對して何等の手出しを爲し給はず、それを不問に附し給ふたのではない。神は全能の神であり又神は正義の神である。罪は必らず罰せずしては措き給はない。彼等の墮落は又一面神の罰である。それは神が彼等の墮落を阻止し給はず、之を其の爲すがまゝに任せて、彼等が神に背いた罪を白日に露出せしめ給ふて、遂に最後の大審判の顯はる日に遁辭なからしめ給ふのである。かくて一切の口は噤まれ、神の正義は崇められ給ふ。それと同時にかゝる者を救ひ給ふ神の犠牲愛の如何に大なるか知られ、神の榮光は全地に滿つる。

神の罰

<sup>24</sup>この故に神は彼らを其の心の慾にまかせて、互にその身を辱かしむる汚穢に付し給へり。彼等が其の慾にまかせて勝手な行をなし、其の身を損

じ、不幸不運に遭ひ、悲痛に泣くやうになつたのは彼等の自由であると同時に彼等が神から離れ、神に背いた罪の罰である。神が之に付し給ふたのである。人は神から離れる時一切の善きものを失ふ。それは「神ひとり他に善き者」はないからである（ルカ傳一八章一九）。彼等が自ら神から離れ、神に背いた時に既に其の罪の罰は始まつたのである。

神の罰の最初に顯はれるものは、人々互にその身を辱かしめる汚穢に耽溺せしめられることである。彼等が自然のうちに神の偉大を見て之を崇めず、その内に溢るゝ豊かな恩恵に感謝しない時、何よりも先に墮落するのは自然の情念である。そして情慾狂盛となつて、肉體に對する尊敬を失ひ、之を己が肉慾遂行の具とするに至る。即ち彼等は相互に恥づべき交際をなしてその身を恥づべき汚穢のうちに耽溺せしめるのである。背教の第一歩は實に此のエロチツクの行動である。如何に

して社會に漲るエロを排斥し得るか。眞の神を拜せよ。彼らは神の眞即ち活ける眞の神を棄て之を易へて偽虚なる神とし、造物主を措きて造られたる物、神ならざる神を拜し之に事ふからである。諸君、我等聖なる神に事ふる者は思ふだに穢はしいことではないか。造物主は永遠に讃むべき者なり　アアメン。

情念が清淨を失ふとき亂倫が始まる。社會に於ける犯罪の奥底に女がある。家庭の悲劇も亦情慾の放恣から來る。情性墮落して男女間の潔い交際はあり得ない。亂倫と犯罪、是靈魂が最後の大審判に向ふ第二の道程である。それ故私は再び云ふ<sup>26</sup>之によりて神は彼らを恥づべき慾に付し給へり。如何に眞の神を崇めず、感謝せず、神ならぬものに事ふる者の情念が紊れてエロの狂舞亂踏が生ずるかを見よ。即ち、女は順性の用を易へて逆性の用となし<sup>27</sup>男もまた同じく女の順性の用を棄

てて互に情慾を熾し、男と男と恥づることを行ひて、その迷に償すべき報を己が身に受けたり。かかる者の行先は推して知り得る。華かに見えた彼等の生活のなれの果は何處ぞ。さしにも盛えた國家衰亡の跡を見よ。神の罰は刻々行はれ、やがて最後の大審判が来る。

情慾先づ穢れて亂倫あり、次に來るのは道德の念の衰失よりする道德の頹廢、不正不義の横行である。情よりの罪には尙氣分同情の餘地があるものがあつた。姦淫は憎むべく、情死は咎むべし。されど義理と人情にからまれて彼等が滅び行く姿を見れば一掬の涙なきを得ないことがある。然るに神の正義に逆ひ故意に邪惡を行ふ者に至つては何等同情の餘地はない。社會に漲るもろくの罪惡は實に彼等が善を欲せず、反つて惡を喜ぶことから來る。此の道義の頹廢は彼等が唯一の善なる神に背いた最も大なる罰である。私はこゝに三度云

ふ。神付し給へり。彼等の罪惡は彼等の自由意志に由るものであると同時にそれは神の罰である。彼等は最初神を知りつゝも神を崇めず、感謝せずして其の理知と道義とは暗くなつた。彼等の心に神を宿し奉らねば、心は次第に腐敗しゆき、彼等は最早神を詳しく知らうとしない。そんな事は自分の幸福に關係はないと思ふ。暫く考へて見て神を深く知ることは反つて出世安樂の邪魔になるを以ていゝ加減にした方がよいと思ふに至る。

25 また神を心に存むるを善しとせざれば、神も亦彼等を愛育善導の御手を引き、その邪曲なる心の隨に爲まじき事をするに任せ給へり、即ち付し給ふたのである。彼等の心は最早真人の心ではない。自ら智しと稱へて愚者となり、神が善惡を見給うやうに之を見ることが出來なくなつた。その心は髓の髓まで腐り果てたのである。彼等は自分は自由獨立人であると思ひ勝手氣儘に振舞ふ。然

し、それは腐敗せる心の汚濁の排出以外の何物でもない。彼等は神に背いて自由の行動をし、神は彼等の自由によつてその心の醜惡を明かに露出し給ふのである。かくて彼等の上に降る最後の大審判は必然不可避となる。

彼等の邪曲なる心の隨に行ふところのものは何か。<sup>29</sup> 即ちもろもろの不義である。今思ひ出るまゝ之を列擧せば、人に對する惡念、人の物を掠奪、搾取しやうとする慳貪、人に對して少しの善意を有せず惡意に滿つる者がそれである。またその腐れ果てた心からは他人の幸福に對して嫉妬が生ずる、進んでは殺意となる。粉争が起る、詭計を弄して人を傷けやうとする、何事にまれけちをつけ、其の最惡を思ふ惡念の溢るる者がある。

また<sup>30</sup> 讒言する者がある。謗る者がある。公然神を排けて神に憎まる者がある。人を侮る者、人の前に己を高ぶる者、己を誇る者がある。惡事を

企つるのに巧妙な者がある。又父母に逆ふ親不孝者がある。<sup>31</sup> 善惡の判断に無知、言に誠實なく恣なる違約、自然の情を失へる無情・無慈悲なる者、彼等の行ふところからして其の心に遡り見よ、活ける生命の泉なる眞の神を其の内に宿し奉らず、そこに在るものは腐敗せる水溜である。ぼうふらが湧き、惡臭を發するのはそのためである。魂は肉體と共に朽ち果てるのである。

彼等の諸惡は皆神に棄てられ、己が儘に放任せしめられたためものにして、斯る事どもを行ふ者の死罪に當るべき神の定、神がかくするは正しき事として之を道德界の秩序となし給ふたその定を知りながら、彼等は啻に自らこれらの事を行ふのみならず、また之を行ふを可しとせり。爰に至つて彼等の心の腐敗、行の不義は其の極致に達する。己れ自ら之を行ふときには時としては激情に驅られ、前後の考を喪失することもあり得るが、

他人の行爲については人は比較的冷靜であつて其の善惡を判斷する餘祐がある。然るに人の惡行を賞讃し、之を善とするに至つて其の心は正に神から相去さること東が西から遠ざかるに同じい。

以上を神を知らない世の人の罪である。然し乍ら神を知れりとする我等には此の罪とその罰である諸惡行が全然ないであらうか。神を知らない者程自分自身の罪には無關心である。罪について少しも苦痛を感じない。眞實聖なる神の御光に照されて始めて、己が罪を悟るのである。諸君『もし罪なしと言はゞ是みづから欺けるにて眞理われらの中になし』ヨハネ第一書一章八である。私は諸君自ら、かゝる罪が自分のうちに有るか無きかを驗し見られんことを勧める。

なんぢ此の民に告げて云へ

『酒壺ツバには酒が盈みちるであらう』

彼ら若し汝に、

『酒壺には酒が盈みちるであらう』

とは知れたこと、おれたちそんな事を知らぬと思ふのかと云ふならば、其の時汝彼らに云へ、

『エホバかく言ひ給ふ。視よ、われ此の地に住む者は王と貴族、祭司と預言者、否、ユダの國とエルサレムの全市民をも酔ひつづれさすであらう。われは彼らを互に打ち合せ、父と子とを諸共に打ち合すであらう。われは彼らの滅ぶのを憐れまないとエホバ言ひ給ふ。赦しもしなければ、不憫にも思ふまい』と。

(エレミヤ記十三章二十一、二十四節)

## ク ロ ム ウ エ ル 傳

## 序論 チャールズ一世 (下)

江 原 萬 里

## 『萬靈節の四法衣』

かやうにチャールズ一世の外交政策は無方針で歐洲大陸に於ける新教主義の諸國の後援者たる名譽ある位置を拋棄し、世に於ける福音の盛衰に全く無頓着でありましたが、それと丁度正反對に、國內に於ては終始一貫、王の宗教政策は嚴重に監督制度の國教會を維持し、國民一同にその信仰個條と儀式との遵奉を勵行されました。王を助けて熱心に此の方針に基き宗教政策を實行した者は、後カンタベリーの大監督となつたラウドでありました。

ラウドは所謂『使徒繼承』即ち、天堂の鍵、教會の磐はペテロを以て代表する使徒たちに與へら

れ、爾來教權は連綿として按手により現在の監督にまで繼承されたことを固く信じ、唯一の眞のキリスト教會は此の監督を基礎とする教會でなければならぬと確信しました。彼によれば、英國の國教會即ち聖公會が制度上ロマカトリック教會と異なるところは唯一つ、それはロマ教會の監督が特に他の監督に優越し、法王として全世界の教會を支配する權能を認めないだけでありませぬ。それ故大監督ラウドの教會政治上の英國教會はロマ法王の代りに教會の首長として英國王があること以外は、全くロマカトリック教會と異なるところはありませぬでした。ラウドは非常に熱心に教會内に侵潤して來たカルビン主義の教會制度と教義とを一掃し、彼の信する初代基督教會の昔に復することを以て一生の使命としました。

彼は説教者が教壇で會衆に向つて説教する場合、國定の教義以外のことを説き、又は國定の儀式を

粗略にすることを嚴禁し、之に違犯する者を假借せず嚴罰しました。

彼の信する所によれば、國家の存立の基礎は國立の教會であり、國教會の存立は國民全體の信念の一致に由る。而して此の一致 unity は劃一 uniformity に在る。『劃一が教會の門内に入らねば國教會の一致を續けること不可能』と云ひ、『國教會内の神を禮拜する形式の優雅と整頓』とを目的としました。

チャールズ一世はラウドの此の方針に大賛成でありました。王の眼には、大監督ラウドは只邪道に陥つて居る國教會を正道に引戻そうとする一保守的改革者どしか見えませんでした。然るに清教徒はラウドを以て、英國の新教主義を廢し、教會をロマに賣る叛逆者としました。さればラウドのする改革は一步步々舊教主義採用であるやうに感じました。教會内で司祭する者の法衣は決して只

單なる白布を肩に掛けたものとは思ひませんでした。それは舊教に歸順を示す一つの表象と見ました。ラウドが預定の教義の説教を嚴禁して、之に代へてアルミアン主義の採用を命じたのは、大監督の意が、『信仰のみにより義とせられる』と云ふ新教主義を棄て、善行により救はれると云ふ舊教主義採用の前提と見ました。

清教徒の辯護士ブリン、牧師バートン、醫師バストキツクは之を誹議して三人とも同様に罰金五千磅(現代では五十萬圓位に當るでしょう)を課せられ、その上兩耳を削かれ、終身禁錮にされました。これを以てしてどの位ラウド主義の勵行が嚴重であり、清教徒に對する迫害が強烈であつて、清教徒が信仰維持のため支拂ふ犠牲が大であつたかを知るに足りません。

### 海防税 (Ship money)

清教徒の信仰上の迫害は甚だ大でありましたが

それは比較的少數の有識階級に限られました。然るに今や王の専制政治のために國民全體が塗炭の苦を嘗め始めました。

王は議會が王の租稅案に協賛せず、王の宗教政策に反對したため、千六百九十二年之を解散し、爾來十一年間全く議會なしに専制政治を行ひ、租稅は勝手に之を徵收されました。父王の時憲法上喧ましい問題となつた海關稅 *tonnage and poundage* は無遠慮に課せられ、其の他商人には種々の營業稅を徵せられました。多くの昔に忘れ去られて居た法律が復活して、その實施を勵行されました。例ば年收四十磅以上の地主はナイト（騎士）にする云ふ法律により、之を拒んだ者に罰金を課し、その金額は十七萬磅（現代では千七百萬圓位）に及びました。又森林法と云ふ法律が反古箱から引出され王室御用林の境界外の土地が急に境界内と認められ、三百年來これを占有して居た者は横領罪とし

て重い罰金を課せられました。

然し此等の苦痛は國中の有産階級に限られましたが、無産者と雖も苛政を免れることは出来ませんでした。王は御用商人に各種の專賣權を與へ、例ば葡萄酒專賣の特許により年三萬八千磅の國庫收入を得ましたが、此の權利を得た者は之により九萬磅の獨占利益を得、葡萄酒の値段は暴騰して國民は三十六萬磅を負担しました。此の外、石鹼、鐵、鹽、其他日用品の專賣あり、國民は之がため物價騰貴のため大に苦しみました。

かやうに王は無理算段をして收入を得られましたが、それでも尙國帑は窮乏し、負債は増加するばかりでありました。それ故王は新に海防稅 *the money* と云ふ租稅を制定賦課され、千六百三十四年先づ之を海岸地方だけに課し、その翌年は山地にまで及ぼして倍額の收入を得ました。

此の課稅は憲法違反であることは何人にも明白

のことでありましたが、國民はこれを訴へる場所をもちませんでした。議會は解散されて既に五年餘となり、裁判所はありますが、そこに訴へても無益であります。裁判官は法律の明文を正當に解釋して之を適用しやうとはしません。當時人々は申しました『判事は誰人も明に之は法律ではないと確知するものを以て裁判し、何人にも道理に合はないと思ふ理窟をつける』と。

一體法律と云ふものは、平時は社會の秩序維持に甚だ有力でありますが、一度國家有事の時に際しては、決してあてになるものではありません。法律の條文は、どうにでも解釋がつき、實權を掌中に握つた者は勝手な理窟をつけて反對のことを敢てなし得るものであります。國に憲法發布せられ、その條章炳として明に、又六法が完備して居ても、國民はそれで安するわけにゆきません。最も大切なものは法律でなく、遵法の精神であります。支

那は目下法權回收の爲、法律の制定實施に焦慮して居ますが、然かも如何にして國民の遵法精神を涵養するかと云ふ最も重要な一事を觀却して居ます。『信仰は法律を堅うするなり』(『羅馬書三章三』)であります。眞の信仰ありて法律は活きるのであります。『神の義』なくして、『法律は堅う』せられないことは出来ません。

今や海防税は國中の大問題となりましたが、裁判所は之を適法と判決し、國民は泣き寝入りする外ありませんでした。然るにクロムウエルの從兄弟に當る清教徒ハムプデンは敢然立つて之を不法とし、斷然その徵收に應せず、重い罰金に處せられても尙王の壓制に屈せず、正義を正義としました。その壯烈は國中の血を沸き立たせました。

王政に對する國中の不平不満は次第々々に大きくなつて來て、之を抑壓するのに、現行法規と普通裁判所とだけでは間に合はなくなりましたので、

從來の樞密院が議會の代用をして、『法律では人民に賦與出来ない權利を之に與へ、法律で禁じ得ない行爲を禁ずる』權能を有する事となり、又昔貴族の陰謀を審判した星廳が利用されました。此の星廳はエリザベス女王の時には法律には反しないが、善良なる風俗、公の秩序に反する行爲を取締るために用ひたものであります。王と民との心が一つであり、王が杓子定規の法律に拘束せられずに國民幸福を計る間は重寶な機關でありましたが、一度民心離反し、王と利害相反するやうになつた時には法律に據らないで人民の行爲を罰するこの機關は壓制の最良の武器となりました。

若し宗教上王の専制を代表して之を實行する者がカンダベリーの大監督ラウドであるとするならば、政治上王を代表する者は當時愛蘭の總督後宰相となつたウエントウオース（後ストラッドフォード伯）であります。王の専制政治の典型を見や

うとするならば、愛蘭を見るべきであります。彼は申しました『世界のごこに行つても、こゝ以上に王の權力の絶大なところは見られない』と。そこには自治政治の機關はありましたが、それは名ばかりで、王の權力が萬能であり、人民は王を代表する總督に服従する外何事も出来ません。總督ウエントウオースは申しました。

自由とか云ふるたいの知れないつまらないこと得意がる代りに、人民は王の公正に信頼し、王の智慧を信じ、王の赤子に對する親心を確信して只管王意に副へばよいのだ。

チャールズ王が父王チエームス一世より承継ぎました帝王神權説、即ち王は神を代表して民を治め、君民の關係は義は主従なれど情は父子であること云ふ説から来る絶對的専制主義は、愛蘭總督にとつては英民族統治上の政治的信仰箇條の一つでありました。そしてそれはカンダベリーの大監

督には英國教會内の信仰統一上必要な武器でありました。此の兩人が肝膽相照し、王を擔ぎ、或は現龍の袖に隠れ、夫れ々々、政治的及び宗教的兩方面で活躍しました。

愛蘭總督は自分の權能が愛蘭に限られて、思ふやう英本國の施政に關與出来ないことをもごかしがり、カンダベリー大監督はその宗教的劃一の理想が清教徒のため思ふやう實現しないためおせりしました。

チエームス一世は嘗てラウドを評して『ラウドと云ふ奴は少しもちつとして居られない男で、いつになつても之でよいと云ふことがない。何でもかでも物事を自分の頭に浮び出た改革案の尖端にまで持つてくる』と。こんな人物が二人して好い氣になつて王と心を合せて、現實無視の一定の型に英國民をはめ込み、空想を英國に實現しやうと日夜焦慮する間に、負擔の苛重に呻吟する民衆と

信仰の迫害に苦しむ清教徒とは共に同一抑壓の下に苦悶したのであります。

王は教會と政府とを以て此兩者を壓迫されたため、神に服はうとする者と地の事を思煩ふ者が共通の利害を感じるやうになりました。『海關稅 *tonnage and poundage* と預定教義とが混一し、海防稅 *ship money* と神の攝理と、人身拘束律と信仰の義とが同一戰線に列し』、人民代表の議會が國の財政を管理すべしとの要求は、教會の制度教義儀式も亦議會の制定によるべしとの主張と一緒になつて、王の政府と教會とに反抗するに至りました。前に述べた革命の條件、即ち知識階級の不滿と民衆の生活苦惱との急激なる合同、反抗は完全に生じました。革命の徵候歴然として現出しました。之で革命が起らずしてすむでしやうか。

イスラエルの民とその神 (二)

江原萬里

歴史の特異

私は前月號でイスラエルの民は神の特選の民であつて、神の攝理と御救とを全人類に顯はし給ふため特別の使命を受けた者であることの徴をその國土バレスチナの位置が世界地理及び歴史に於ける重要性に求めた。更に之を彼等自身の歴史に徴せば一層明瞭である。

此の民族の發祥地はアラビヤの砂漠であつた。そこに發生したセム人種の一部族が、牧畜を業として生活して居たところ、多分大旱に遭ひ饑饉に迫まれ、牧草を追うて北方に移住し、今から大凡五千年前(日本歴史紀元の二倍の昔)カルデヤのウルに一時定住するに至つた者がそれである。

彼等は多年砂漠に生活して激烈なる日光と乏し

き雨量とのため常に空腹を忍び、遙かに天上を仰ぎ爛干たる星を見て人生の凡ての善きものを遠き未來に待ち望み、之に由つて現在の困厄に耐えたのである。此の現在の忍耐と未來の待望とが此の民族の特質であつた。そして此の二つは凡ての善き宗教の生ずる土壤である。彼等が特に宗教的天才であつたのは之がためである。そしてアラビヤの砂漠は物質的には物を生ずるに適しない土地であるが、精神的には實に豊穰なる宗教的産地であつた。モーセと預言者たちのイスラエルの宗教、ナザレのイエスが創め、ペテロ、パウロ、ヨハネが世界に廣めた基督教、右手にコーランを左手に劍をかざして一時歐亞の大半を征服したムハメットのイスラム教は皆此のアラビヤの砂漠からの産物である。衣食足つて始めて眞の神を知り得るのではない。患難窮乏こそは神を知るに最も善き條件である。ホイエルバツハやマルクスは此の事

を知らない。

アラビヤの砂漠に於て忍耐と待望とを養はれた彼等はカルデヤのウルに移住して凡そ七百年の後、此の地が物質的豊富にして精神的墮落をなす危険があるがため、彼等の首長アブラハムはその神から『嗣業として受くべき地に出で往けこの命に遵ひ、その往く所を知らずして出て往』き（ヘブル書一章八）、西へ々々エウフラテス河を遡り、南轉して遂にカナーン（低地）に寓居するに至つた。こゝが彼等の『嗣業として受くべき地』であつた。それは決して土地として善き地ではなかつた。それ故一時アブラハムは更に南進してエヂプトの沃野にまで遊牧したが、再び此の地に歸へり住み、神の約束を信じ、『神の營み造り給ふ基礎ある都を望』みつゝ現在の困難に耐え『未だ約束の物を受けざりしが、遙かに之を見て迎へ、地にては旅人また寓れる者』と思ひてこゝに天幕生活をしたの

である。彼が民族を率ゐてこゝに來り住むに至つたのは、彼の信じた神の命に遵つたのである。彼等の神が此の地に此の民族を來り住まはしめ給ふたのである。

其の後此の民族は饑饉に迫まれ難をエヂプトに避けそこに數代を過した。然るに彼等はそこでエヂプト化しなかつた。そして奴隸として酷使されあらゆる暴虐の限りを受けた無告の民が壓制者の鐵鎖を斷ち切り、こゝを出て紅海を渡り、曠野を横斷し、三十餘年を曠野に過して遂に再び『乳と蜜との流れるカナーンの地』に歸へり來たのは彼等自身の力ではなかつた。彼等の神がモーセを遣はしてかくなさしめ給ふたのであつた。他の民族は其の國土の産物である。バツクルが英國史に云うやうに、氣候其の他の物的環境が之を造るのである。一度國土を喪失し異郷に住み、周圍の環境が變化する時にはその民族としての特質は次第

に失はれるのである。然るに此の民のみはそうでなかつた。自然が彼等を一族として存続せしめず又其の特色を奪ふことを得なかつた。社會的支配階級も此の民を同化せしめ得ず、滅ぼすことも出来なかつた、此の民がエヂプトの支配を脱し得たのは物的社會力ではなかつた。自然史觀も唯物史觀も之を説明出来ない。彼等は其の出埃及を以て神の救の御力に由るとした。聖書は彼等がごんなに深く之を感銘したかを語つて居る。

彼等がエヂプトから『汝の神エホバの汝に與へ給ひし地』(申命記一七章一四)に歸へり來た時、其の地の西南には勢強大なるベリシテ人あり、東南には戰鬪に長け慄慄なるエドム人あり、北西の海岸には地中海を己が庭の泉水のやうに思ひ、早くから沿岸諸國と通商貿易をして居たフェニキア人があつた。又自分が住まうとする地には土着の野人が群居し、之と共同生活を営まねばならな

かつた。そして彼等自身が曠野に三十餘年を過した遊牧の半野蠻人であつた。寧ろ此の地の土人は早くから農業に従事し、彼等よりも文化が進んで居たのである。彼等が此の地に歸住するには此の周圍の民族に對抗し、又土着民を征服することを要した。然かも自分よりは文化の進んだ農業民のうちに交はり、其の農業を生業とするやうになり、次第に其の生活の態様は周圍の諸族と殆ど差異なきものとなつたのである。

若し彼等が周圍の諸族に同化され、又は征服され終つたならば、最早彼等は此の諸族と同様に其の跡を絶つに至つたであらう。彼等をして周圍に打ち克ち獨り今尙存続せしめ得た原因は唯一つ、彼等が拜した神は此等の周圍の者が拜した神と異なり、純粹に道德的なる全宇宙創造の神であつたことである。彼等の神はモーセを通じて十誡を與へ給ふた神であつて、周圍の諸民族の拜する神の

やうに只收獲の豊穰、子孫の増加、物的幸福安樂の神ではなかつた。されば彼等の中に出でたサムエルの如き先覺者は、彼等が周圍の民と混交することを恐れ、神の命なりとして彼等の諸族を滅滅しやうとしたのである。

彼等の神は周圍の諸民族の神と異なつて居た。然し彼等自身は周圍の諸民族と異なるところは殆どなかつた。神は彼等に對して誠實であり給ふたが、彼等は彼等の神に對して不誠實であつた。屢屢其の命に背き、眞の神を拜せず、之を棄て、周圍の諸族の拜する神を拜し、其の肉感的儀式を喜び、其の生活態様を取り入れ、次第に周圍の者に化しやうとしたのである。之を阻止し、彼等をして常に眞の神に立ち歸へらしめた者は彼等自身でなく、彼等の神であつたのである。

神は度々彼等のうちに『神の人』を遣し、眞の神の言を傳へ、其の民を指導せしめ給ふた。爲政

者と民とがその言に聽從した時は國を興り、民は榮えた。ダビデ王の當時には國威は四方に輝いた。然るにソロモンの榮華の後、爲政者は神に背くこと度々であつて、國は次第に衰へ、ソロモン王の死後は國は二分され互に相争つた。『分れたる家は立つ事能はず』遂に北方の大國アッシリアのため北部のイスラエル國先づ滅ぼされ、イスラエルの十二の支族のうち十族はアッシリアに流囚となつて連れゆかれ、次で南部のユダ國もバビロン王國のために滅ぼされて、其の民はチグリス、ユウフラアス河畔に移された。

若し此の民が世界に於ける普通の國民の一つであつたならば、此の時永久に失はれ最早此の地上に其の存在を探ぐり求めることは不可能となつたであろう。然るに國滅び、彼等を統一する國土と神殿と禮拜の儀式とを失ひ、一切の國家的社會的制度が滅ぼされて六十餘年を経た後、彼等は再び

故國に歸還して國を建て、その祖先アブラハム以來の傳統を繼承するに至つたのである。

驚愕の眼を以て我らは爰に恩惠豊かなる運命の働を見る。嘗て一族のうちにつたかやうの事は史上他に類を見ない。數知れぬ多くの國民が次第に強大なる力を獲得し、戦争と隷屬との不幸から脱した事はある。又多くの者はそれから後更に他國民の束縛から解放されて、自由と獨立とを獲得することに成功した。それ等の事は史上良く見受けることである。

然るに我等は爰に全く特異なる觀物を見る。一の國民が全く散らされ、永久に無に歸せられた。その故國は半ば荒廢に、半ばそこに住む他國民のために所有せられ、そこに殘留した者は、貧窮し、只下級の勞働に由つてしか生活出來ないやうにされ、他國民の下に在つてパンを求め外に何の達し得らるべき望もなくなつた。そ

して公然尊敬もされず、恐怖もされず、彼等は墮ち往く運命のまゝに委されたのであつた。彼等が打つて一團となり、共同の力を發揮するには全體として餘りに少數であつた。何人が觀ても彼等の將來は見通しがつく。彼等は如何に父祖の遺訓に根強く服ふとも、次第に亡びゆき、消滅するばかりである。然るに此の民族は此の不幸の中に在つて、或る新なる精神的生活を始めるべく覺醒し、今まで最近の預言者たちによりぼんやり示されて居た國家再建の希望が眼前に浮び出でた(ヨスト著ユダヤ教史一卷一七)。

そも此の希望は何處から之を得たのであるか。自然的環境にあらず、社會的制度にあらず、又彼等自身の精神に由らず、實に彼等を選び、特別の民とし、之を以て世に救を示し給ふ彼等の神の無條件なる恩惠以外にないのである。

彼等自身の政治史から見れば此の民族程不名譽

極まる苦難の歴史を有つものはない。彼等は他國民の侵入攻撃に抵抗し、血を以て之を排除する力なく、微弱の民として彼等の如きはなかつた。彼等は宛も二つの引白の間に介在する者の如く、上白なるアツシリア、バビロン及びペルシヤ、下白なるエヂプトのために強く壓縮せられ、細かに挽き碎かれ、其の後又ギリシヤとロマのために抑壓せられ、長年月の間平和状態を持續すること能はず、自分自身の文化を創造し、物質的に榮える事は全く不可能であつた。

彼等に寧き日ごてはなかつた。宛も織機のおさのやうに南から北へ、北より南へ投げやられ、又葡萄酒のやうにナイル河畔とエウフラテス河畔に注がれ、更に又蹴鞠のやうに近隣の大帝國の消長に従ひ蹴飛ばされた。バビロン王ネブカドネザルは之を北から蹴り、エヂプト王ネコは之を南から蹴返し、マセドニアのアレキサンデル大王とロマ

のシーザーは之を西から蹴つた。そして遂にロマ皇帝ベスバシアン(紀元七十年)及びハドリアン(同百三十五年)により再び國は滅ぼされ、首都は焼かれ、民は世界に散され、爾來千數百年の間、諸國民の間に流浪し、排斥せられ、度々大虐殺を受け、あらゆる苦難を嘗めて今日に至つたのである。

然るに嘗て彼等を征服した諸帝國の民皆滅びて今は存在しないに拘はらず、世にも稀れに見る苦難を受けた彼等は今尙存續して居るのである。嘗に存在して居るのみではない。彼等は先祖アブラハムに與へられた神の約束を信じ、モーセを通じて受けた律法を守つて之を誇り、五千年の久しきに至つてその民族としての生命は少しも衰へず、彼等のうちから今尙各方面に向つて世界的人物を輩出して居るのである。かゝる民族は史上他に一つもない。まことに不思議と云はねばならない。それのみではない。此の度の世界大戰の結果と

して彼等の故國バレスチナは永く土耳其の領土であつたのが聯合國の管理に移り、世界三十餘ヶ國の協賛の下に彼等は千八百餘年の後再びその故國に歸還し、こゝに National Home 國民的家郷を建設し得るやうになつたのである。彼等の故國の地理的世界的重要は既に述べた。彼等は今新にその先祖アブラハムに對する神の約束『我汝が寄寓る地即ちカナンの全地を與へて永久の産業となさん』(創世記一七章一)の誠實を経験しつゝある。世に稀れなる患難に遭ふことは彼等に神がない事ではない。之があるに拘はらず、否患難あるが故に神の特別の恩寵を悟るのである。聖書は實にかかる民の神に關する經驗の記録である。

## 柏 木 通 信 (第五信)

齋 藤 宗 次 郎

彼が無かつたならば『聖書之研究』の發刊は出来なかつたに相違ない。内村先生に其功を賞揚されし山岸壬五兄は、實に恩師の大業を隱密の間に援助せんが爲め、五十餘年の生を與へられし人と見ても大過あるまい。彼が明治二十三年より三十餘年間、温順で正直で謙遜と勤勉とを以て恩師に仕へし後、其晩年を故郷新潟の地に送り、終に美はしき信仰の歩みを残して、靜かに世を去りてよりはや三年となつた。彼の生涯を追想して神の恩寵を稱へんため、三月六日夜其記念會を、郊外高井戸なる盲人基督信仰會に於て開いた。主催者永井、秋元兩氏の外に、恩師夫人、畔上先生、内海氏、藤澤氏等友人十數名集つて、彼の美談逸話を語り祈禱を捧けて、各自の懐く愛と禮とを現はした。

教友寶田一藏氏が其夫人と共に、近年蒙る所の苦難の經驗は寔に尋常ならざるものがある。神の國を嗣ぐ者の特權であるが、最近二男文吾君を生後一ヶ月目に天に送つて更に痛みを加へられしを見た。三月十二日の告別式に於て、

余は文吾君の生死の聖意を探つて家人を慰め且つ力づくるに努めた。此世に在りては、戰友互に愛し合ひ祈り合つて、終りまで信仰を全うするに意を用ゐねばならぬ。

三月廿三日夜、恩師の記念會を催す爲の準備祈禱會を開いた。祈は生命に達する通路である。神意實現の豫表である。信仰生活の鍵である。人類が屢々閉塞の閹域を排して光を迎へたる榮ある歴史は、常に敬虔の人の祈によりしものであつた。我等に取りては、凡ては祈の結果であらねばならぬ。出席者六十餘。過去一年の間夫々遣されたる方面に於て、主の十字架を證せし人々の久し振りの會合なればイエスの血汐の脈々として其間を流れ、共に感涙を催す程の喜びであつた。俄然襲ひ來りし雷鳴驟雨の下に、靜かに捧げられたる十四名の祈に續いて、重要な二三の議案は此の滞りもなく決定せられた。各自滿されたる胸に扉して春の星月夜を家路に向つた。

大空一碧、富嶽八州に鎮たる所、肅々と暮れ行く落日の如く、神の人内村先生一たび歸り去つて茲に一周年、天然は春より春へ移つた。人生は不安より不安へ進んだ。然れども恩師に學び其導きによりて救拯の恵みに預り、主の教

會に列るに至りし者には、只恩恵只進歩只感謝の連續であつた。面吹く風は腥く、砲彈の雨は辛くあつたが、勝利の楯に身を托して頌榮の辭を歌ひ續けることが出來た。記念會は祭典ではない。故人の呼び戻してはない。既に肉に於て人を知るまじき我等は、只管謝恩の誠意を現はすと共に恩師の播かれし種子が、自他の靈魂の中に、又相互の間に何れ程發育せしかを知つて神を讚美すべきである。廿八日午前十時半恩師の墓前に、恩師夫人祐之博士を始め、有志の兄弟姉妹立ち並んだ。石原氏の司會の下に讚美歌は歌はれ祈は捧げられた。各々の心に新たなる記憶を浮べ、其偉大なる信仰と使命と事業とを全備し給ひし父なる神に感謝を奉りて徐ろに散じた。

#### 一、内村先生追憶記念會

三月廿八日午後一時柏木今井館に於て開く。御遺族及び舊聖書研究會員二百三十餘名出席。中には靜岡、長野、千葉、栃木、岩手等の遠方より懇々上京せし人もあつた。矢内原忠雄氏司會の重任に當つた。讚美歌四十三番を合唱し湯澤氏の聖書朗讀、金澤氏の祈禱の後に、船長山榊氏（一九〇〇年前カルバリー山上にて成就せられし恩師の事業）、

年長者永井氏（鐵毒事件及び理想團當時の内村先生）、最初の獨立傳道者淺野氏（國の内外に及びし恩師の偉大なる教化の實例）、高弟にして教會人たる坂田氏（教會信者の立場より見たる内村先生）、三十餘年の恩誼に浴せし私（驚くべき罪の手を舉げて四たび恩師の胸を撃ちしに、熱き祈りと懇ろなる教訓と峻烈なる呵責と滴る涙とを以て應ぜられし實話）の感話に三時間を送り、司會者の燃ゆるが如き感想と警告と感謝とを以て一と先づ閉會。會衆一同の呼吸一線に傳はりて、嚴肅の氣地軸を壓するの觀があつた。是亦純愛の産物である。茶菓少憩和順の間に、互の胸襟は開かれた。五時内村全集刊行に關する畔上氏の報告について、大島老先生の『米國に於ける内村君』と題する懷舊談があつた。青年内村先生が到る所に純潔なる日本武士の精神を發揮して、米國人を驚嘆敬服せしめられたる多くの事實を悠揚の態度で物語られた。若き先生の氣魂の閃く光景は聽衆の心眼に髮髯し、腹壁を衝き出づる笑聲は屢々堂の内外に響いた。正面に掲げし祖父君の寫眞を凝視しつゝ、物思ひに耽る令孫正子さんの可憐の姿は、見る人々に強き感動を與へた。麗かなる春の日祝福に滿されし記念會は、幾多

の賜物を懷にして散會の帷を靜かに下した。

二、内村先生一周年記念基督教講演會

翌廿九日午後一時、東京の中央日比谷公會堂に於て開會。實に誰人に取つても生死の大問題、我等の命掛けの戦鬪である。聽衆一千一百名。願れば夙に我等は寂しき密室に祈り、獨靜かに涙の裡に、十字架上のイエスより賜はりし贖罪の福音である。然れどもこは決して片隅に葬り去るべき一私事ではない。此福音たるや、曾て時滿つるに及びて、世界の中心シオンの山上に高く掲げられ深く基されし、途又眞又生命なるイエス・キリストである。アレテ丘上より聲高くアテンス市民に向つて説かれし福音である。ウイテンベルヒ城頭に正否を質されし福音である。大手町の衛生會館より血を以て叫ばれし福音である。今此處に立つ所の者は、假令赦されたる罪人無名の士の一團に過ぎぬにしても、神の命じ給ふ事には従はざるを得ない。我が愛する同胞は萬國の民と共に之を受くるか受けざるかにより、死活の決する岐路に彷徨ふ時に何をも顧慮する暇はない。

定刻、司會者藤本武平二氏は嚴かに開會を宣した。讚美歌（四三）、聖書朗讀（ロマ書八・三一以下）、祈禱、讚美歌

(二六〇)を以て、信頼を神に献け祝福を神より受けて神人の和平成るや、内村先生の全生涯を以て説かれし十字架の福音の絶対性と其恵みに浴せし我等の責任とは、開會の辭さして司會者より明白に述べられた。それより石原兵永氏(福音の實力と題し、恩師の遺せし輝く事業、苦境を踏破せし勝利、終生を貫く絶対の信仰、全人類全宇宙を包む所の愛心、是皆十字架より流る、福音の力なるを證した)。三谷隆正氏(共愛物と題し、神と基督とは一様に信者を愛し給ひ、凡ての信者は謙遜りたる心を以て共に同じ神と基督とを信じ、愛し、仕へ奉る。其處に生る、平和圓滿の眞の教會の意味を明かにす)の講演あつて五分間休憩。

四四五番の讚美歌を以て榮光の神を崇めし後に、畔上賢造氏(先驅者としての苦難と題し、先生が靈的荒蕪の日本を開拓するに當つて、内外より迫る多くの苦難に遭遇せしが、常に信仰によつて之に耐へ、之に勝ち、以て大使命を果し得たる恩恵の生涯を偲ばれた)。塚本虎二氏(内村先生はクリスチャンなるかと題し、先生はクリスチャンである。然し聖書知識に富んだ、洗禮を受け又施した、傳道に身を献げたといふ様な理由によつては、はない。誠に以養亞

書五十三章に示されしキリストの如き、疑はれ罵られ鞭うたれし生涯を送りし意味に於て、眞のクリスチャンである(と斷じた)の講演によつて恩師の生涯の意義は判明せられた。塚本氏の祈禱は力と恵みに満された。會衆の心は祈る人の信仰の一點に溶け入つた。天より聲あり。好し、善し、我等今之を聞けりと。アメン。榮光神とキリストの上になれ。斯くて四三七番の歌を歌ひ、一同靈感に打たれたるま、暫時默禱の清境に全身を埋め、日比谷公會堂の記録に不朽の事實を残して、四時半順序亂れぬ退散を敢てした。是れ果して何の力によるか。

### 三、記念晚餐會

午後六時、レインボーグレルに開かる。出席者百三十名。名古屋氏司會の權能を適宜に行使す。食前の感謝を以て賑やかなる食堂の一時間を過し、饗て晚餐を畢へて卓上談話に移るや、左の十二人指名に應じて立つこととなつた。

一、久保田氏。内村先生が、一高時代に祈を以て難局に當りし話。二、黒崎氏。昨今の記念會に臨み、全體に「力」の横溢を認めて感謝に堪へざること。三、加藤氏。(ジャワ島より來る)食人種がキリストの福音に接して樂園の民と

なりし實話。四、照井氏。徳川慶喜公の葬儀を送られし内村先生の至誠謹嚴なる態度に敬服し、次に一訪問者が、「我を崇拜する者は我が敵なり」と先生に叱呼せられて去り行きし話。五、小林氏。神を畏れ人を怖れずの先生の書を見て感ぜし話。六、高木氏。二十二年前先生に學びし折の經驗によつて、準備時代の必要なるを感ぜし話。七、湯澤氏。男らしき基督信者たれと先生に教へられたること。更に愛によつて團結するの必要なること。八、石河氏。各自獨立の信仰を抱き、責任を感じて活動すべきこと。九、青山氏。先生の死が漸時美果を産出し行く實證。十、望月氏。キリストに在りて犠牲の生活を感ずること。十一、盧氏。紫外線の如き先生の大恩を感謝すること。十二、内村祐之氏。神の恩寵によつて最良の一年を送り、全集の刊行計畫、今回の記念會等を見、我等遺族の痛める心は頓に癒さる。九時半、南原氏の感謝の祈禱に一同の信仰は燃えて、勝利の旗章の一段と鮮かに翻るを仰いだ。各々月光を蹈んで勇ましく家門に急いだ。

知らない。只一つのことを知る。即ちキリストによつて開かれ、パウロによつて明かにせられ、恩師によつて教へられし純福音の信仰に歩む時に、凡てのクリスチャンは愛によつて衷心より一致するに至ることを。方法も畫策も努力も財貨も要らない。然り皆有害である。我等は又來ん一年も亦此信仰のみによつて進み行くであらう。主よ此等の群を憐み導き給へ。

翌三十日、余は陸中花巻より上京せし照井氏と共に鎌倉なる江原主筆を訪ひ、宿痾の故に此等の集會に參列し得ず、獨、山腹の靜居に坐し松籟に和して熱心なる祈を恩師の遺業に、同志の信仰に、日本國の救拯の爲に捧げつゝ、ある彼の愛の眞心に向つて、恩寵溢るゝ事實の報告を投じた。彼の顔は十字架の光に輝くを觀た。一切は唯御心に！と祈つて別れた。

鈴木彌美氏と政池ひろ子との結婚式は四月二日丸の内某所に於て舉げられた。山本泰次郎氏の司式は誠に相應はしくあつた。聖書による教訓と注意とは骨髓に徹する程の峻刻を示した。祝筵に招かれし我等三十餘名は、一齊に此美はしき神の事業に祝意を獻ぐるの喜びに預りしを感謝した。

## 編輯餘録 主筆

○人が天職を見出した時には勞働は快樂となり、働く事程楽しいものはなくなる。働くには何等の報酬をも要しなくなる。人々が勞働を苦痛とし、澤山の報酬を得なければ喜んで働かないのは、其の仕事のうちに自己の天職を見出さないからである。それ故彼等は他に快樂を得やうとして金がほしくなる。『我等の國は物を有つこゝになく働くこゝに在る』とカーライルは云つた。かゝる者に取つては働きたい事程大きな苦痛はないのである。然るに神は時々勞働の快樂を奪ひ去り、無理強ひの怠惰を課し給ふのである。

○私は四年前再び鎌倉に歸住して以來私の足は一步も町から外に出たこゝはない。私の家は鎌倉の入口のトンネル附近に在り、三面山に圍まれ、稍遠く離れて一軒の農家がある外最早其の先に家はなく、鎌倉の最北限界に在る。私は町から一足も外に出ないばかりではない、殆ど私の家から外に出ない。終日二階の非齋兼寢室で讀書と筆稿に暮す。門外に出るのは一日一回乃至二回、數丁先の郵便箱を訪問する時だけである。私が日本國を見るの

は此の往還の途中 場末の路上だけである私は復興の帝都を知らない。パピロンがどんなに繁華にならうと私は關係がない。

○鎌倉聖書塾は大きな打撃を受けた。先日來講師の一人である今度東京高等學校教授となつた山田幸三郎君が流行感冒に罹りもう一ヶ月以上休講され、次で私も流感で三週間臥床した。今は起床したが尙此の先當分講義は出来ない。幸にも醫學士の湯淺健君が來り援けてくれて眞に感謝である。私は臥床中聖書の現代經濟觀に載せる私の處女論文富の増進を修補し始めたところ、約倍となつた。書物は預定の頁數を大分超過しそである。醫學博士藤本武平二君が見舞はれ、懇ろに療養則を訓された。曰くなるべく訪客に面會せず、一にも二にも三にも安靜、働くな休め。現代も全く絶縁して、勞働の快樂も捨て、怠惰の苦痛を取れとの事である。

○然し乍ら私は啞さなり、人さ離れて益々神と近く語り得るやうになつた。人は神を得ば一切を得たのである。神を失へば假令全世界を得てもそれは空しい。神は時々人を無理強ゐるに怠惰ならしめて神に立ち還へらしめ給ふのである。病氣はそのためである。『なんぢ

立ち歸へりて靜かにせば救を得、おだやかにより頼まば力を得べし』である。神は之を命じ給ふのみでなく、愛する者をそうするより外する道ならしめ給ふ。

○神の最大の賜物は世界中を驅け回る活動力ではない。神は神に相應しき賜物を與へ給ふそれは主イエス・キリストである。眞人にして且つ眞神、彼を受け、彼に信賴し、彼に在りて生き、一つとなり、否、彼が我が凡ての凡てとなり給ふやう全部彼に本城を開放つ時如何なる人生の曠野を通過し、上りゆく道は十字架であつても、大なる歡喜がある。深甚の平和がある。輝く希望がある。

○永遠の生命とは彼の生命のこゝである。彼の生命が私の生命となつて全天地に溢れる活力の源泉に接續するのである。死からの復活は當然となる。此の力は又病を癒す力である彼を受けて病は癒えるであらう。癒えなくても彼を得ばそれ以上の祈求は他に存しない。

小生所勞のため當分休養の必要有之候に付  
甚勝手乍ら御訪問はなるべく御見合せ被下度  
候。  
江原萬里

# 新刊豫告 (五月中旬發行の豫定)

江原萬里著

## 聖書の現代經濟觀

總布裝四六版函入  
定價一圓二十錢  
送料十二錢

本書は聖書に據つて生きる基督者は現代の經濟生活を如何に觀、如何に之を生活するか、聖書は之に就き何を教えるかに關する感想と論文の收録である。マルクスの社會主義を除く外現代の經濟學の趨勢は次第に聖書の見解に近接しつつある。基督者は經濟學說に煩はされる要なく、大膽に聖書に據つて立つ信仰的生活を營んで遂に此の地球の承繼者となるであらうと説いたものである。本書に收めた長短約三十篇は孰れも思想と生活、其の他の諸雜誌に一度掲載したものであるが、此度嚴重に修正添削した。著者は學窓を出てから滿六年を大阪の住友總本店に勤務し、後六ヶ年母校なる東京帝國大學に助教授として經濟學を講ずる者となつたが病を得て職を辭し雜誌思想と生活、聖書の眞理の主筆たること爰に五年、其の興味を中心は肉から靈に、經濟學書から聖書に轉じた。本書は此の順禮のある道程を語るものである。

### 内容抄錄

地を嗣ぐ者は誰ぞ。故郷歸還。運命が攝理か。文明の進歩と自然の復讐。ガラリヤの春。士族の商法。鈴木馬左也翁。平野國臣。ロイドガリソン。基督者とは何者か。後篇。富の増進。

東京市外淀橋柏木九四六

### 發行所

### 獨立堂書房

附記。若し讀者諸君の需あらば聖書之眞理社申込に限り、著者が署名するてあらう。

### 聖書の眞理定價 (送料共)

- 一 部 二十錢
  - 中年(六部) 一圓十錢
  - 一年(十二部) 二圓十錢
  - 海外一年分 二圓六十錢
- 拂込は振替東京六三三七五番  
聖書の眞理社宛のこと

### 思想と生活 合本

- 第一卷 二 圓 送料八錢
- 第二卷 一圓八十錢 送料六錢
- 第三卷 二圓三十錢 送料八錢

昭和六年四月二十七日 印刷  
昭和六年五月一日 發行

神奈川縣鎌倉町扇ヶ谷三四三  
編輯印刷 江原萬里  
兼發行人

東京市外澁谷町向山九七  
發行所 聖書之眞理社  
名古屋市中區流川町一八  
印刷所 一粒社印刷所  
東京市外柏木九四六  
發賣所 獨立堂書房  
振替東京一九四六八番

(昭和三年二月十六日)  
等三種郵便物認可)

聖書之眞理 第四十三號

昭和六年五月一日發行  
(毎月一回一日發行)

本誌定價二十錢